

誠実な熱意

上 廣 榮 治  
うえ ひろ えい じ

先日、同年代の会友と昔話をしていて、社会も人の心も変わってしまったという嘆きになりました。高齢者同士にありがちな話の成り行きです。

では、会はどのように変わったと思いますかと、その方に聞いてみました。

昔に比べると、会友たちがよく勉強するようになった。優秀になった、と彼は言いました。そして少く考えてから、「ただ、昔の会には熱血というか、たぎる思いとでもいうような熱い気持ちをもっと強かったように思います。会が若かったということかもしれませんね。今はもつと大人になって、賢くなったのではないでしょうか」と言つて微笑ほほえみしました。その微笑みが満足の微笑みなのか、寂しい微笑みなのか、にわかには判断できませんでした。

結論を先に言えば、組織にも人にも「熱い思い」は必要だと、私は思います。それは「熱意」といってもよいでしょう。老若男女ろうじやくなんにょにかかわりなく、熱意がなくては望みはかなわない、熱意がなければ物事は成就しないと思うからです。やる気がなければ、結果が出ないのは当たり前です。

私たちは、「仕合わせになりたい」と熱望するから、倫理を実践するのです。なんとしても「我も人も

が仕合わせになる社会を創りたい」という強い熱意が、私たちを倫理の実践に駆り立てるのです。だから、熱意は大切なのです。

「熱意」ということで思い出されるのが、「経営の神様」と言われた松下電器（現・パナソニック）の創業者、松下幸之助さんのことです。松下さんは常々、社員たちに熱意の大切さについて語っていたそうです。「仕事や経営をするときに、何がいちばん大事かといえば、あふれるような情熱であり、熱意である」「知恵や知識や才覚というようなもの、必ずしも最高でなくてもいい。六〇点でもいい。しかし熱意だけは最高でなくてはならない」「どんなに才能があっても熱意がなければ、この人の下で大いに働こうという気分にはならない」などという言葉が松下さんの名言として伝えられています。

私たちは仕事をするとき、大切なのは能力だと思いがちです。勉強でもそうですね。しかし、何よりも大切なのは熱意だと松下さんはおっしゃるのです。熱意をもつてすれば、最初はできなくても、いつかはきつとできるようになる。しかし、たとえ能力があっても熱意がなければ事は成らない。仕事は能力があるからできるのではなく、熱意があるからできるのだ、ということでしょう。

松下さんは、熱意の大切さについて、梯子はしこや階段にたとえて説明していたそうです。何としても二階に上がりたい、どうしても二階に上がろうという強い熱意が梯子を思いつかせ、階段を作り上げた。二階に上がっても上がらなくても、どちらでもいいと思う人の頭からは、決して梯子や階段は生まれない。梯子や階段は、才能が作ったのではなく、熱意が作ったのだということです。

まさにそうです。「こうしたい」「こうなりたい」という強い思いこそが、人に実践をうながし、人を成功に導くのです。「実践の原動力は熱意である」といつてもよいでしょう。

能力や才覚は人によってさまざまです。能力の高い人も、あまり高くない人もいます。しかし、熱意を持つことは誰にでもできます。その気になれば、誰もが最高の熱意を発揮することができるはずです。その最高の熱意が、自分を変え、人をも、時には社会をも動かすのです。不可能を可能にするのです。

松下さんはみずから最高の熱意を発揮した人でした。パナソニックのホームページにある「松下幸之助物語」には、敗戦直後の混乱のようすが綴られています。敗戦の翌月、松下電器に対してGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）から生産中止命令が出されますが、一か月後には解除され、生産が再開されます。ところがそれも束の間、GHQは松下は財閥だとして、松下電器を「制限会社」に、松下家は「財閥家族」に指定されてしまいます。しかし、規模からみても業容や財界での位置からみても松下は財閥ではない、「GHQは間違っている。間違いはただすべきだ」と考えた松下さんは、大阪から東京にあったGHQの財閥課に何度も足を運んで説明しました。その時の遣り取りがホームページに載っています。

——「松下は財閥やない。この資料を見てください」「マツシタさん、また来ましたか。何度来たってだめですよ」「いいや。間違いがただされるまで、わしは何度でも足を運ばしてもらいます」——

財閥指定を受けた他の会社の社長たちは次々と辞任していききました。しかし、松下さんだけは頑として辞任せず、せっせとGHQに出向いていって説明し続けました。この粘り強い説明が功を奏したのか、昭和二十四年、GHQは松下家への「財閥家族」指定を解除し、翌年には松下電器への「制限会社」指定も解いたのです。松下さんのGHQ訪問は足かけ五年間、五〇回に及びました。

こうした経験を持つだけに、松下さんは社員に、「一ぺんや二へん成功しなくても、十ぺんやろうとすれば何でもない。五年かかろうが十年かかろうが、成功するまでやめないことだ」と、よく言っていたそ

うです。成功するまでやめない。夢がかなうまで努力し続ける。これこそ究極の熱意だろうと思います。

では熱意があれば、どんなことを望んでもよいのでしょうか。もちろん否です。松下さんも「正しい熱意」「誠実な熱意」「素直な熱意」という言葉をよく使っています。人々の幸福を自らの企業の使命と位置づけた松下さんらしい言葉です。もちろん、不正な熱意や不誠実な熱意、心の歪んだ熱意では、物事を成功に導くことはできません。倫理にかなった実践でなければ、望みは達成できないでしょう。そして、私たちの「我も人ももの仕合わせ」に対する熱意、倫理実践への熱意こそ、最も「誠実な熱意」であることは、言うまでもないでしょう。

誠実な熱意こそが最もよく人を惹きつけ、希望を実現させ、目標を成就させます。誠実な熱意さえ失わなければ、どんな苦難も乗り越えられます。わが会の改革も会場の活性化もみな然りしかです。

では、私たちの目の前の課題である改革のために、強い熱意をもって取り組むべきは何でしょうか。

それは、会友一人ひとりが自分にふさわしい目標を設定し、それを着実に実践していくことです。ただ私から言えることは、できるだけ身近な小さな実践から始めることが成功への近道だということです。足元にこそ宝があるとは、これまでも申し上げてきたところです。松下電器は自転車の小さなランプから出発しましたし、デイズニールランドはたった一匹の小さなネズミから生まれたのです。誠実な熱意が大きな夢を実現したのです。

そして、本会が目指す「我も人ももの仕合わせ」に満ちた共生社会の創建もまた、実現するまであきらめない誠実な熱意をもってすれば、いつかはそれに肉薄できると私は信じております。

さて、皆さんの熱意のほどは如何いかにでしょうか。